

愛知のDESIGN1960 - DESIGN2060

名古屋～近郊に、同時期竣工の三つの日本を代表する大学建築がある。槇文彦設計で1960年竣工の「名古屋大学豊田講堂」は大規模改修が施され、アントニン・レーモンド設計で1964年竣工の「南山大学名古屋キャンパス」は耐震補強を施し、ともに今も大切に使われている。吉村順三、奥村昭雄設計で1966年開学の「愛知県立芸術大学」は学科新設以外に主な改修の手が施されないまま、今、既存建物取り壊しと新築建て替えがはじまっている。

「1960-2011」を振り返ると、同時期の建物が、その後の手入れにより50年後のスタンスに大きな隔たりを生じている。「2011-2060」を考えると、「名古屋大学豊田講堂」、「南山大学名古屋キャンパス」は、手を施しながら成長し続け、「愛知県立芸術大学」の現校舎は、もうないかもしれない。三つの大学建築の2060に「1960 - 2011」が大きな意味を持つ。

「愛知県立芸術大学」講義等に開学精神を表す「直指天」という初代学長上野直昭の揮毫がある。思索に迷わず直接的に自分を指し示す「直指」と崇高で広大な「天」を仰ぎ見る「直指天」は、芸術に対する崇敬の念と“個の尊重”という理念を象徴する。今「愛知のDESIGN1960-DESIGN2060」を考える時、「直指天」の精神を思い起したい。建築や環境が、時と共に変化することは、むしろ自然なことだ。只、「直指天」の精神は、建築や環境が変わろうとも不変であり、50年前、現在、50年後を繋ぐものは、人間の精神、志であることに他ならない。

